

■『稲穂』第2号の発刊に当って

## 同窓会の明日のために

平田 達

(中47回 在京飯田高校同窓会会長)

私が同窓会会長就任の依頼を受けたとき、「本当に自分でいいのだろうか」と迷ったことは前号の『稲穂』に書きましたが、その迷いの根底には、少しだけ逃げたい気持ちと、依頼して下さった人達の気持ちがどれだけ本気かということを知りたい気持ちがありました。

本気だということが解った時から、私はずっと自分と向き合う孤独な時間の連続だったように思います。「やあやあ、しばらく」「誰々さんを知っていますか」「ああ、彼はなあ」そんな会話を繰り返す一年一回の総会だけで終わってしまう同窓会の在り方に、誰にも言えない大きな疑問を持ち続けていたからでした。

就任して最初に考えたことは、同窓会という会自体の運営に、出来るだけ多くの同窓生に関わりあって貰う方法はないだろうかということでした。年一回の総会の進行を役員主体でやるのではなく、年度単位の同期生にお任せしたらどうだろうか。次の時代につなげることも考え、一〇年という時を区切って、高校一〇期生と二〇期生に総会のすべてをお任せすることにしてみました。

総会の重要な行事としての講演会をどうするか。会の進行をどうするか。それら的一切を皆さんが実によくやってくれました。これを機会に、役員は若い期の人達との接点

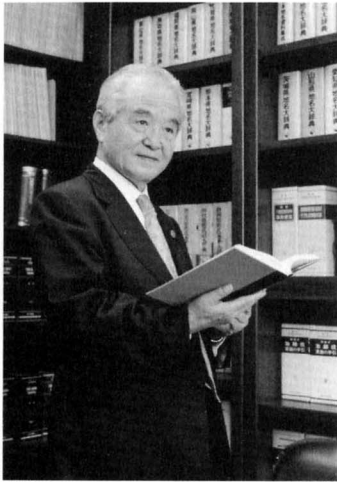
が出来、沢山の感動を共有することが出来たのです。次の年度には一二期生と二期生が担当というようにして総会の運営をお任せしていくうちに、いつの間にか一〇年が過ぎ、活動も定着してきましたので、静かに身を引くことを決めておりました。

これも度々お話ししたと思いますが、気弱な私は『稲穂』の発刊を一緒にやっていただけならば、あと二年間だけということ、会長に居座ることになってしまいました。

『稲穂』の編集作業は始めてみると大勢の人達が参加して下さって、話題が尽きない楽しいものでした。私も若い人達も、年齢差を越えて互いに心の奥深くまで語り合い、「同窓会のために、また南信のために、何かが出来ると」という共感の中で、心の手をしっかりと握り合ったのです。『稲穂』の刊行を中心にして、全員が頑張っています。

人は、人と支え合って夢のある何かをし、その共感の中から文化をつくっていくものように思います。

同窓生の皆さん。全員参加の充実した同窓会活動をしましょう。  
御声援をよろしくお願い致します。



●ひらた・さとし

昭和5年伊賀良生まれ。  
飯田中学47回卒業。同28  
年中央大学法学部卒業、  
同34年弁護士事務所を開設して現在に至る。法律  
を使わない事件の解決法  
を目指す。著書に『心の  
種蒔き』がある。今年度、  
信州飯田ふるさと会連合  
会の会長に就任。